今後も気になる切実な医療問題　広報げろ　2007.12

今後も気になる切実な医療問題

　病院が抱える切実な医療問題は、なんといっても医師不足です。政府が始めた新臨床医師研修制度は大学が医師を派遣してきた制度を破壊し、医師が自由に赴任病院を選ぶ事ができるようになったために地方病院に医師が来なくなりました。下呂市でも大きな打撃を被っています。

　産科医師の不足は地域でお産ができなくなるという予想もしなかった事態となりました。しかし、重篤になった妊婦の受け入れ拒否は医師不足によるばかりでなく、経過のわからない新患を引き受けて訴えられるような問題を起こしたくないといった傾向もうかがわれます。意を尽くして治療しても結果が悪ければ逮捕されるというような現在の医療行為に対する社会の対応が医師を消極的にさせています。

　救急医療現場でも考えさせる問題が起きています。子供が刺され搬送途中で亡くなるという痛ましい事件がありました。最寄の救急病院でとりあえず輸血などの救命処置をしてから搬送すればと考えるのは結果論でしょうが現在の医療社会情勢ではこのような事件では専門病院指向もあり一般の救急病院では受け入れにくい状況も考えられます。下呂市では選択できる救急病院は二つしかありません。金山病院では対応できる医師がいる限り重篤患者も受け入れ、ともかく救命処置を行って搬送に耐えうる状態にしてから搬送する体制をとっています。この体制をとるようになって今のところ高エネルギー外傷が金山病院で亡くなることはありません。

　専門病院、専門医指向はがんの治療においても時として問題になります。がんは専門病院でという考えの元、遠くの病院で手術を受けしばらくは定期通院していても次第に足が遠のき再発発見が遅れたり合併症に苦しんだりといった例があります。がんの治療は手術だけでなく合併症や再発の発見、治療のためにも長期にわたる定期的な経過観察が大変重要です。そのため金山病院は生活を維持していく上でもがんの治療は近くの病院で受けられるように努力しています。現在胃がん、大腸がん、乳がんなどのほとんどは市内の病院で標準的な手術ができます。金山病院ではすべてのデータを患者様と共有し、家庭の都合などで遠くの病院で治療を希望される場合でも、その病院の医師と連携して治療にあたる体制をとっています。

　麻酔医のいない病院での手術が問題視されています。幸い金山病院には麻酔標榜医が常駐していますが、以前より麻酔を専門に行う医師は少ない上に手術は麻酔をかけなければできないので外科医は常に麻酔の訓練を受けてきています。本来、手術ができない麻酔医はいますが、経験のある外科医は手術の麻酔はできるのが普通です。また、気管に管を挿入し全身麻酔がかかった状態はきわめて安定しており麻酔を機械に任せてしまうことも多いのです。麻酔状態を不安定にするのは手術操作なのでこの点から見ても外科医は手術麻酔に習熟している必要があるのです。

ご意見をお寄せください。

下呂市立金山病院　院長　古田智彦